

琉球大学学術リポジトリ

児童の道徳判断に関する研究： 年齢とIQの変数について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 嘉数, 朝子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1871

児童の道徳判断に関する研究

— 年齢と IQ の変数について —

嘉数朝子*

A Study of Children's Moral Judgements — Age and IQ Variables —

(Received July 10, 1981)

問題と目的

動機と結果に関する道徳的判断の研究は、1930年代の Piaget の先駆的研究以来、今日までもなお、発展的な方向で続けられている (Piaget, 1957)。この面に関する Piaget の研究方法のモデルは、意図は良いが大きな損害の例話と、意図は悪いが小さな損害の例話を示した後、両者のうちより悪い方を判断させ、その理由を聞くのである。用いる場面は、“過失”、“盗み”、“うそ”などである。面接質問による被験者の反応は、結果論的判断と動機論的判断とに分類される。

Piaget (1957) の発達段階説によれば、児童の道徳判断はほぼ7歳を境にして、結果論的判断から動機論的判断へと移行することが指摘されている。彼はこのような発達の変化をひきおこす条件として、自己中心的思考からの脱中心化という子どもの認知構造の変化と、子どもの社会的関係：仲間集団との対人関係における諸経験の変化という相互に関連した2つをあげている。

児童の道徳性の発達に関する実証的な研究において、道徳的成熟度（動機論的判断）を規定する要因として、従来年齢・知能・教育・経験・性差などが研究されてきた。この中で年齢の要因に関しては従来の研究結果は一致しており、道徳的成熟度を規定するものとして確証されてきた。しかし、その他の個人差要因（知能、教育経験など）についての研究結果は必ずしも一貫していない。

前述の Piaget (1957) の理論によれば、道徳性の発達は認知能力の発達を前提としているので理論的には知能は道徳的成熟度の重要な規定要因と考えられる。しかし、従来の実証的な研究結果の中では、動機論的判断との間にほとんど関連を見いださなかったもの (Vinacke, 1954; Durkin, 1959) と、関連を見いだしたもの (Johnson, 1962; Whiteman, 1964; 丹羽, 1957) があり、一致した

結果が得られていない。各々の研究について、以下に詳しく紹介しよう。

関連がみられなかったものとして以下の研究がある。Vinacke (1954) は、概念形成の質に対する知能の重要性を認めているものの、教示と探索の重要性に比較すると、知能はあまり強調されていない。Durkin (1959) は、子どもの正義の概念の研究において、年長の子は年少の子よりも動機に注目するという結果を得た。しかし、何が正しいかという子どもの概念と知能の間には、ほとんど関連を見いださなかった。

次に、知能との間に関連を見いだしたものとして、以下の研究がある。Johnson (1962) は、年長の子どもたちと青年の道徳判断の研究において、知能と年齢、親の態度の間いくつかの関連を見いだした。Boehm (1962) は、経済的に中の上の子どもと労働者階級の子どもの間に、そして有能な子どもと平均的知能の子どもの間に、道徳判断の成熟度に違いを見いだした。Whiteman (1964) は、7歳～12歳の被験者について、道徳的成熟度（動機論的判断）を規定すると考えられる諸変数（年齢・知能・行動・教育経験）の影響度を検討した。その結果、動機論的判断の出現率は、年齢とともに増加するだけでなく、知能水準の上昇に伴って増加する傾向を示した。丹羽 (1957) は、幼稚園児を被験者として、知能と母親の子どもに対するしつけの態度・および社会的環境の三要素を子どもの道徳判断の成熟度と比較検討した。面接法と質問紙法の2つの方法を用いた。その結果、動機論的判断の出現率は、知能が高いほど高くなり、また母親の態度がよい方向にあるほど高くなることが示された。

以上のように、道徳的成熟度の規定因としての知能を実証的に検討した研究結果は、年齢の場合ほど一貫していない。そこで、本研究では、Piaget (1957) の発達段階説からひきだされる道徳的判断の成熟は、歴年齢のみ

* 琉球大学教育学部心理学教室

でなく精神年齢（知能）によっても規定されるという仮説を実証的に検討することを目的とする。

さらに、知能の道徳的成熟度に対する関与度は、発達段階によって異なるのではないかと考えられる。青年期の研究において、Eisenberg-Berg (1979) は、向社会的道徳判断と利他主義と政治的リベラリズムと知的能力の関係をみた。その結果、男子の場合は向社会的道徳判断と知的能力とは高い相関があり、利他主義ともかなりの相関があった。女子では、リベラルな社会政治的態度のみが道徳判断と関係があったと報告した。この研究から、高学年になるにつれて、知的発達の道徳判断の成熟度への関与度は低下し、性差も現われてくると考えられる。本研究では、上述の目的に加えてこの点も検討する。

次に、方法論の問題であるが、Piagetタイプの道徳判断課題においては、例話対が固定されたパターンであるので、被験者は単に反応セットを学習しただけではないかという指摘がある (Gtutkin, 1972; 二宮, 1979; 中峰, 1980)。そこで、本研究ではGtutkin (1972) の用いた意図と結果の次元の値を組織的に変化させた3つの例話型を用いる。

方 法

被験者 沖縄県のW小学校1年生（平均年齢＝7：00ヶ月）、K小学校の3年生（平均年齢＝8：08ヶ月）、5年生（平均年齢：10：7ヶ月）を各々2学級、計6学級であった。さらに各年齢群を3つのIQレベルに分類した：IQのレベルは、田研式C1（1年生）、田研式B1（3、5年生）の総得点に基づいて、70～90、95～105、110以

上の3段階に分類した。最終的な被験者数は1年生が66名、3年生が59名、5年生が47名の計172名であった。

道徳判断テスト Gtutkin(1972) タイプの例話を、二宮(1979)が修正したものを6対用いた（中峰, 1980参照）。例話の理解を助けるために、動機に関する部分と結果に関する部分を、それぞれ彩色画に描いた絵カード（35cm×27cm）を併用した。

手続き 小学校1年生に対しては、個別に実験が行なわれた。実験者は被験者と対座し絵カードを見せながら例話を読み聞かせ、被験者の判断を求めた。被験者の反応は実験者によって記録された。

具体的教示は、次のようなものであった。はじめに「今から、お話を2つずつ読みます。どちらのお話にも、あなたと同じくらいの年のお友だちが出てきます。よく聞いていて、始めに読んだお話に出てきたお友だちとあとから読んだお話に出てきたお友だちを比べたら、どちらがより悪い子だと思うか教えて下さい」と教示した。その後、略画を見せながら例話を読み聞かせ、被験者が十分に例話内容を理解したかどうかを確認した上で、「どちらが悪い子だと思いますか、それともどちらも悪い子だと思いますか。それとも、どちらも悪くないと思いますか」と質問した。この質問に対する被験者の判断が名前反応である。さらに「それはどうしてですか」と質問し、判断の理由について説明させた。これが説明反応である。

小学校3、5年生に対しては、10名ずつの小グループを構成し、集団で実験を行なった。実験者が絵カードを提示しながら例話を読み聞かせ、その後被験者は各自で判断及びその理由の説明を質問用紙に記入した（図1参照）。

(1)	{	じろうくんは、たろうくんよりもわるい。
	{	たろうくんは、じろうくんよりも わるい。
	{	じろうくと たろうくんは、おなじくらい わるい。
	{	じろうくんも たろうくんも、 わるくない。
(2)	それはどうしてですか。	
	{	

図1 記録用紙の一例

道徳判断の得点化の方法 名前反応と説明反応の両方において、被験者の反応が明らかに動機論的判断に基づく場合に、各々1点を与えた。したがって、6例話対があるので、各被験者の得点の最大値は12点であった。

結 果

発達差と性差 道徳判断テストにおける平均動機論的判断得点を、学年別、性別に表1に示した。これに基づいて学年と性の3×2の分散分析を行なった。表2はその結果を示したものである。

表1 学年別・性別の平均動機論的判断得点 (人数)

	男 児	女 児
1 年 生	7.87 (38)	7.10 (40)
3 年 生	7.18 (49)	7.50 (28)
5 年 生	8.97 (36)	10.14 (35)

表2 平均動機論的判断得点に関する分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
1 性 別	3.165	1	3.165	< 1
2 学 年	224.979	2	112.490	12.812*
3 交互作用	34.644	2	17.322	1.973
4 誤 差	1,931.589	220	8.780	

* $p < 0.01$

この表から分かるように、学年の主効果のみが1%水準で有意となった。さらに、分散分析の誤差項を用いて、個々の平均値間の差についてt検定した結果は次の通りであった。学年の主効果は、5年生が、1年生や3年生よりも動機論的判断得点が高いことを示している（それぞれ、 $t = 4.263$ 、 $t = 4.617$ 、いずれも $df = 225$ ）。

性の主効果、および交互作用は有意とならなかった。したがって、これらの年齢段階では、道徳判断の成熟度に性差はないといえる。この結果から、これ以後の分析は男女をこみにして行なった。

発達差とIQ差 本研究の目的は、動機論的判断の出現率は、歴年齢の上昇とともに増加するだけでなく、知能水準の上昇によっても増加するという仮説を検討することであった。表3に、IQを3段階に分類し学年別に平均動機論的判断得点を示した。これに基づいてIQと学年の3×3の分散分析を行なった。表4はその結果を示した

ものである。

表3 学年別・IQ別の平均動機論的判断得点 (人数)

	1 年 生	3 年 生	5 年 生
IQ 70 ~ 90	5.58 (19)	6.42 (31)	9.35(20)
IQ 95 ~ 105	7.89 (28)	8.32 (19)	9.67(15)
IQ 110 以上	19.26 (19)	10.22 (9)	11.25(12)

表4 平均動機論的判断得点に関する分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
1 学 年	167.636	2	83.818	12.215*
2 I Q	245.862	2	122.931	17.915*
3 交互作用	25.782	4	6.445	< 1
4 誤 差	1,118.559	163	6.862	

* $p < 0.01$

この表でわかるように、年齢の主効果、IQの主効果が、いずれも1%水準で有意となった。

さらに、分散分析の誤差項を用いて、個々の平均値間の差についてt検定した主な結果は次の通りであった。

IQの主効果は、IQが下位から中位、上位へと上昇するにつれて有意に成績が上昇していることを示している（順に $t = 3.115$ 、 $t = 3.052$ 、いずれも $df = 163$ ）。学年の主効果は、5年生が1年生や3年生よりも有意に成績がよいことを示している（それぞれ $t = 4.636$ 、 $t = 11.895$ 、いずれも $df = 163$ ）。1年生と3年生の間には有意差が認められなかった。この理由としては次のようなことが考えられる。①実験方法の差（1年生は個別実験、3年生は小集団実験）。②平均IQの差（1年生は100、3年生は89）と、IQのrangeの差（1年生は70~130、3年生は40~130）。このように3年生にはIQの低い児童が多く、以上のような理由のために、1年生と3年生の間には明確な差がみられなかったと考えられる。

次に、図2に学年別、IQ別に動機論的判断の出現率を図示した。この図からも、各学年においてIQレベルの上昇にともなって動機論的判断の出現率が増加していくことが分る。学年別に、IQレベル毎の上昇傾向をt検定した結果、5年生の下位群と中位群間のみを除いて、すべて有意となった。このことは、高学年になると、道徳的成熟度を規定するIQの関与度は弱まることを示唆しているのではないだろうか。

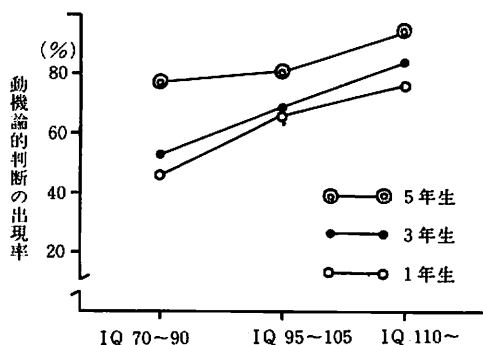


図2 各群の動機論的判断の出現率

考 察

本研究は、道徳的成熟度の規定因として、これまでの研究で確認されてきた年齢に加えて、知能の変数を取りあげた。道徳的成熟度と知能の関連をとり扱った従来の実証的研究の結果は一貫したものではなかった (Durkin, 1959; Whiteman, 1964など)。しかし、Piaget (1957) の発達段階説によると、道徳判断の発達は児童の認知構造の変化を前提としているので、理論的には道徳的成熟度と知能との関連は高いと考えられる。これから、動機論的判断の出現率は、歴年齢の上昇ばかりでなく、知的能力の水準の上昇によっても増加するという仮説がたてられた。この仮説を検討するために、小学校1年生、3年生、5年生を被験者として、IQレベルを、70~90、95~105、110以上の3段階に分類して、各群の動機論的判断得点を比較した。結果は前述の仮説と一致するものであった。すなわち、学年の主効果もIQの主効果も有意となった。これは、Johnson (1962) や Whiteman (1964)、丹羽 (1957) の研究結果とも一致するものである。これから、知能水準が高くなるにつれて、道徳的成熟度も高くなることが明らかになった。

次に、第2の仮説として、道徳的成熟度に及ぼす知能変数の関与度は、発達段階によって異なるのではないかと考えられた。これは Eisenberg-Berg (1979) の青年期の研究から示唆されたものであり、彼女の研究では性差も有意となっていた。また山岸 (1976) によれば、道徳性の発達の基礎には知的発達があり、そのため低学年では知的能力の関与度が高い。しかし、道徳性の発達には知的発達に加えて、他者との相互性の中で獲得されてくるものがあり、子どもの社会関係・対人関係における諸経験の増加に従って知的発達の関与度が低下すると考えられる。

本研究の結果においては、年齢とIQの主効果はあったものの、交互作用は得られなかった。すなわち、どの年齢においてもIQレベルの上昇によって動機論的判断は増加した。したがって第2の仮説は支持されなかったことになる。ただ、動機論的判断の出現率を図示した図2を見ると、5年生の上昇傾向は、1年生や3年生に比較してゆるやかであった。t検定の結果も、5年生では、上昇傾向は有意となりにくい方向にあった。また、性差も有意となっていないことから、小学校5年生の段階では道徳的成熟度におよぼす知能の関与度がまだ高いが、対象をもっと高い発達段階：前青年期頃まで拡大した場合、知能の関与度は低下するであろうと予想される。その場合は、柴田 (1977) が指摘するように、知能に加えて他の個人差変数 (教育経験、社会的階層、母親のしつけの型) なども検討する必要がある。

要 約

本研究は、児童の道徳判断について次の2つの仮説を検討することを目的とした。

- 1) 動機論的判断は、年齢のみだけでなく、知能水準によっても規定される。
- 2) 道徳的成熟度の規定因としての知能変数の関与度は発達段階によって異なる。

上記の検討を行なうために、道徳判断において結果論的判断から動機論的判断への移行期と考えられる7、8歳を中心に、小学1年生、3年生、5年生を被験者とした。

道徳判断テストとして、Gutkin (1972) の例話型6対と略画を提示し、その反応から道徳的成熟度を査定した。知能段階は、田研式小学校低学年用田中B式知能検査第1形式 (C1) と、新制田中B式知能検査第1形式 (B1) を使い、IQ70~90、IQ95~105、IQ110以上の3段階に分類した。結果は、以下の通りであった。

- 1) 第1の仮説は支持され、動機論的判断は年齢の上昇だけでなく、知能水準の上昇によって増加することが明らかになった。
- 2) 第2の仮説は全面的には支持されなかったが、高学年になるにつれて知能水準の道徳的成熟度に及ぼす影響度は小さくなる傾向が示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり、宮本久美子さんの多大な協力を得た。ここに記して感謝します。

引用文献

- 1) Boehm, L. 1962 The development of conscience: a comparison of American children at different mental and socioeconomic levels. *Child Development*, 33, 575-590.
- 2) Durkin, D. 1959 Children's concept of justice: a further comparison to the Piaget data. *J. Educational Reserch*, 52, 252-257.
- 3) Eisenberg-berg, N. 1979 Relationship of prosocial moral resoning to altruism political liberalism, and intelligence. *Developmental Psycology*, 15, 87-89.
- 4) Johnson, R. C. 1962 A study of children's moral judgements. *Child Development*, 33, 327-354.
- 5) 中峰朝子 1980 児童の道徳的判断に関する発達の研究—意図と結果の提示順序効果について— 琉球大学教育学部紀要 第24集第2部 217-222.
- 6) 二宮克美 1979 児童の道徳的判断における意図の認知とモデリング効果について 教育心理学研究 第27巻 1-10.
- 7) 丹羽淑子 1957 就学前児の道徳判断の発達に関する調査 教育心理 5巻 162-166.
- 8) Piaget, J. 著 (大伴茂訳) 1957 児童の道徳判断の発達 同文書院
- 9) 柴田薫 1977 道徳性の発達と教育 金港堂出版
- 10) Vinacke, W. E. 1954 Concept formation in children of school ages. *Education*, 74, 527-534.
- 11) Whiteman, P. H. 1964 Development of children's moralistic judgements; age, sex, IQ and certain personal-experiential variables. *Child Development*, 35, 843-850.
- 12) 山岸明子 1976 道徳判断の発達 教育心理学研究 第24巻 29-38.